

# 初期メソポタミア史のなかのディルムン、マガン、メルハ

前川 和也

国士舘大学 21 世紀アジア学部

森 若葉

総合地球環境学研究所

南部メソポタミアでは、鉱物はほとんど産出せず、利用できる木材もすくない。これらは南部メソポタミア外の地域から輸入されていた。前3千年紀後半から前2千年紀前半までの時期にかんしていえば、南部メソポタミアとの交易に参加した地方として楔形文字文献にしばしばあらわれるのは、シリアやディヤラ河流域地域などをのぞけば、ディルムン、マガン、メルハである。この時期に書かれたテキストでは、これらがそれぞれ、バーレーン、オマーン、そしてインダス文明の地域を指していることについては、いまは研究者の見解がほぼ一致している。のちにも触れるように、マガンがアラビア半島側のオマーンだけでなくホルムズ海峡をへだてた対岸、すなわちイラン海岸部をも含んでいるのではないかという問題が、未解決のままのこされているだけである。メソポタミアは、ペルシア湾をつうじて、これらの地域と交易していた。近年これらの地域での考古学調査・発掘が進むとともに、メソポタミアと東方諸地域のあいだの海上交易についての文献研究も深化しているから、ここで、時代ごとにメソポタミアとディルムン、マガン、メルハとのかかわりを概観しておくのも無駄なことではなからう。

## 1 初期王朝時代 III 期

私たちが知りうるかぎり、この時期のメソポタミア楔形文字文献にはディルムンのみが言及される。マガンやメルハはあらわれない。じっさい当時、ディルムンは、シュメールの人々が海路で物産を輸入するさいの唯一の中継地であつたらしい。人々は船でディルムンまで出向き、そこでさらに遠方から（たとえばメルハやマガンから）到来していた商人たちと交易交渉をおこなっていたのであろう。なおこの時代やそれ以降に書かれた楔形文字テキストで「ディルムンの船」がしばしば言及されるが、おおくのばあい、この語は「ディルムン人の船」の意味ではなく、ディルムンまでの航海に耐えられるように、南部メソポタミアで建造された船を指している。前24世紀中葉のラガシュでは、人々はしばしば「ディルムン船」の形状をした青銅容器を神殿に奉納していた<sup>(註1)</sup>。

この時期のラガシュ王朝の創始者ウル・ナンシェは、ディルムンから船で木材をラガシュまで運んだとくりかえし語っている<sup>(註2)</sup>。また王朝の末期に記された行政記録には、「商人 (dam-gar<sub>3</sub>)」が王室のためにディルムンの銅を輸入したとある<sup>(註3)</sup>。いうまでもなくディルムン (バーレーン) は銅の産出地ではない。銅はマガン (オマーン) から、あるいはさらに遠方からディルムンに送られてきていたにちがいない。「ディルムンのシェケル (gin<sub>2</sub>-dilmun)」という表現は、

その頃南部メソポタミアで成立した語彙リストにあらわれるだけでなく、はるか西方シリアの都市国家エブラの行政文書にも頻出する<sup>(註4)</sup>。当時すでに、メソポタミア・シリア世界において、交易では金属にかんして共通の度量衡が使用されており、それにディルムンという語が冠せられていたのである。

初期王朝時代の南部メソポタミア人は、ディルムン以南については、ほとんどなにも知らなかったかもしれない。ラガシュ文書とほとんど同じ時期にエブラで書かれた文学テキストでシュブル（北メソポタミア）、シュメールとならんでディルムンが言及されていて、このシュブルとディルムンが、それぞれシュメールの北、南を指していると思われるからである<sup>(註5)</sup>。

ただし、前 24 世紀に南部メソポタミアとディルムンの交易を担ったのは、「商人」だけではなかったことに注意しておかなければならない。のちにくわしく述べるように、ウル第 3 王朝時代（前 21 世紀）では、gaeš (GA.KASKAL) とよばれる官職者が公的な海外交易の最終責任者であった。そして、初期王朝期後半に成立した語彙リストにも gaeš 官職があらわれるし (ED Lu E 83)、またラガシュ文書のなかに、「エラムの船」で交易された物産を gaeš<sub>2</sub> (KASKAL.GA) が王宮に運びこんだ記述や、彼がディルムン交易を差配していたことを示す記録がある<sup>(註6)</sup>。いっぽう、すくなくともアッカド時代やウル第 3 王朝時代には、「商人」のおおくは、出資者から集めた銀をもとでの一部として、ときには王権とはかなり独立した交易活動をおこなっていたふしがある。

## 2 アッカド時代

アッカド王朝時代にはいと、状況は一変する。文書にはディルムンだけでなく、マガンとメルハも言及されるようになる。王朝の創始者サルゴンは、ディルムン、マガン、メルハの船が首都アガデの港にまで繫留されたことを誇っている<sup>(註7)</sup>。この時代には、たしかにメルハからの船が南部メソポタミアまで来たこともあった。メルハ人（船員）に食料を与えている記録がのこっているからである<sup>(註8)</sup>。メルハ語通訳がいたこともわかっている<sup>(註9)</sup>。ただ行政文書には、メルハからなにが輸入されたかは明記されていない。これにたいして、マガンからは銅、紅玉髓 (gug<sub>2</sub>)、šuba<sub>3</sub> 石、青銅製品などがもたらされた。また、ディルムンとの交流もつづいていた。港湾で「ディルムンの船」のために働いた労働者についての記録がのこっている<sup>(註10)</sup>。そして、この時期にメソポタミアと東方との交流がさかんであったことをもつとも雄弁に語っているのは、インダス文明地域からもたらされた印章や、メソポタミア円筒印章といった工芸品の意匠である。後者には、東方にしか棲息していない珍奇な動物が描かれているからである<sup>(註11)</sup>。

アッカド時代にイランやはるか東方インダスの物産がメソポタミアにさかんにもたらされた理由のひとつとして、アッカドがイラン諸地域を軍事制圧したことをあげることができる。じっさいアッカド諸王の碑文は、彼らによる西方シリアやイラン各地での征服活動の記述で埋めつくされている。そしてアッカドがイラン西南部のマルハシを制圧したことによって、メソポタミアと東方との交流がいつきよに盛んになったように思われる。

近年、前 3 千年紀後半のイランにかんする研究がめざましく進展しつつある。なかでも、アッカド時代の王碑文だけでなく、ウル第 3 王朝時代の豊富な行政文書とイラン側の文書をも駆使したシュタインケラーの仕事は、画期的であった<sup>(註12)</sup>。彼によるイランの歴史地理研究の成

果は、つぎのように要約される。1) アッカドの王碑文によれば、アッカドにもっともはげしく敵対したイラン諸国のひとつはパラフシュ（Parahšu）であったが、パラフシュはのちのシュメール語文獻にみえるマルハシ（Marhaši）のことである<sup>（註13）</sup>。2) パラフシュ / マルハシはアンシャン（首都はテル・マルヤーン）の東方に位置し、キナマーン、ケルマーン、シャフダド、テペ・ヤヒヤ、ジーロフトを含む地域である。3) パラフシュ / マルハシはアッカド王の征服政策の主目標のひとつであり、それはかなりの程度実現された。つづくウル第3王朝時代にはマルハシは独立を保ち、一貫してウル王朝とのあいだに友好関係を維持していた。4) とりわけウル第3王朝時代には、マルハシは経済的に（またおそらく政治的にも）マガンと密接な関係をきづいていた。5) シマシュキ（Šimaški, LU<sub>2</sub>.SU.A.KIとも書かれる）は、ウル第3王朝時代後半になってイラン高原で最強となり、その領域は、北はカスピ海ちかくにまで達し、また南はアンシャンに接していた。シマシュキと他イラン諸国家、ウル王朝との複雑な外交関係は、いわゆる「シマシュキ王名表」やシュメール史料を活用することによって、かなりの程度まで正確に復原することができる。

マルハシは、南メソポタミアで珍重された石の産地として知られていた（「マルハシ石（marhašu/marhuša）」<sup>（註14）</sup>やdu<sub>8</sub>-ši-a石<sup>（註15）</sup>など）。シュタインケラーはこのパラフシュ / マルハシをケルマーン-テペ・ヤヒヤ-ジーロフトを包含する地域とした。そしてこの考えは、マジドザーデによるジーロフト地域コナル・サンダルでの近年の発掘のおどろくべき成果とあいまって、おおくの研究者に受け入れられつつある。少なくとも前3千年紀にはこの地域で独自の文化が大発展していたことが、いまやあきらかになってきた<sup>（註16）</sup>。〔ただマジドザーデはジーロフト地域をアラッタと同定したいようであるが、やはりこれは誤りであろう。シュメール語叙事詩で、アラッタはウルクの王エンメルカルやルガルバンダと争った都市と記述されているが、メソポタミアの王碑文や行政文書にアラッタがじっさいに言及された例はない<sup>（註17）</sup>。もしアラッタが伝説上の土地でないとすれば、それはさらに東方、あるいは北方に位置していたとしなければならないであろう。〕

アッカド王朝創始者のサルゴンはパラフシュ / マルハシを破り、みずからを「全土の王、エラムとパラフシュの征服者（字義どおりには殺戮者）」と称している<sup>（註18）</sup>。彼の息子であり、おそらく第3代の王と考えられるリムシュはパラフシュ / マルハシともっとも激しい戦闘をおこなったようであり、彼もまたこの称号を採用している<sup>（註19）</sup>。さらに第4代の王ナラム・シンは「パラフシュにいたるまで」のイラン諸国を征服したことを誇った<sup>（註20）</sup>。

私たちは、これらアッカド諸王がパラフシュ / マルハシを軍事的に制圧したことによって、メソポタミアの東方との交流機会が一挙にふえたと考える。

まず第一に、メソポタミアの人々はさらに東の世界すなわちメルハについての情報に、より頻繁に接することができるようになったはずである。リムシュ王碑文のひとつに、イラン高原の諸国とメルハがともにパラフシュ / マルハシに同盟してアッカドと敵対したとある（Frayne, RIME 2:57-58, Rīmuš 8）。じっさいこれは、メルハがメソポタミア側のテキストで政治的なコンテキストで言及される唯一の例であるが、アッカドの書記は、パラフシュ / マルハシのさらに東方にメルハが位置していたことをはっきりと認識していた。ウル第3王朝第5代の王であるイビ・シンの碑文によれば、彼のもとに、「メルハのまだらのイヌ」と称されるヒョウ（ないしチータ）がマルハシから届けられている<sup>（註21）</sup>。おなじような事例は、すでにアッカド時代にもみられたにちがいない。

第2に、パラフシュ / マルハシを制圧することによって、この地域で産する鉱物や石材が大量にメソポタミアに流入しはじめたであろう。げんに、さきに言及したリムシュ王碑文によれば、アッカドは、おそらく閃緑岩に同定される eši 石、du<sub>8</sub>-ši (-a) 石などさまざまな石を「パラフシュの戦利品」として獲得したのである。

第3に、パラフシュ / マルハシからの鉱物や石材は、おおくのばあい、陸路でなく海路で南部メソポタミアに運ばれていたのではなかろうか。パラフシュ / マルハシの中核であったジーロフト地域はホルムズ海峡からはさほどとおく離れているわけではなく、鉱物や木材を海岸まで運ぶことは困難ではなかったであろう。これらがさらに対岸のマガンに運ばれ、そこでメソポタミアの船舶に積みかえられ、ペルシア湾を北上したのではなかろうか。マガンは銅の産地としてはやくからメソポタミアに知られていたが、この時代になってディルムンとおなじように東方との中継港としての役割をはたしはじめたというのが、私たちの考えである。

この点で興味をひくのは、「マガンの戦利品」という表現が、閃緑岩に刻まれたナラム・シン王碑文にみえることである<sup>(註22)</sup>。閃緑岩はオマーンでは産しない。だから、ありうるシナリオとは、パラフシュ / マルハシで獲得された閃緑岩がホルムズ海峡をはさんだアラビア半島マガン（オマーン）の港でメソポタミアの交易関係者に引きわたされたということではなかろうか。すこし後、ウル第3王朝の創始者ウル・ナンムとほとんど同時代にラガシュ王であったグデアは、閃緑岩（eši）をマガンから輸入したとくりかえし語っている。ただしこのことから、少なくともグデアの時代には、マガンが、現在のオマーンだけでなく対岸のイラン海岸部までをも包含した地名として用いられたのではないかと考える研究者もいる<sup>(註23)</sup>。プトレマイオスの記述や、古代ペルシア語、現代のイランの地域名 Makran の分析などにもとづいて、もともとマガンはイラン海岸部あるいはイラン海岸部とオマーンをともに指していたという見解もある<sup>(註24)</sup>。

けれどもグデア碑文の記述は、閃緑岩が「マガンの山岳地帯」で産したことの十全な証拠とはいえない。ほとんどの碑文では閃緑岩は「マガンの国 (kur ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>)」からもたらされると書かれ、「マガンの山 (hur-sag ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>)」とあるのは、1例だけである (Gudea St. D)。前3千年紀のはやい時期からオマーン地方が、メソポタミアと深い関係をもっていたことは確実である (D.T. Potts 1990 I: 89f.; id. 1997: 168)。いっぽうでオマーンとホルムズ海峡対岸のイラン（とりわけジーロフト地方）とのあいだにも密接な交流があった。オマーンの土器製作はジーロフト地方の工人の移住によって開始されたらしい (D.T. Potts 2006)。いっぽう、メソポタミアとの交流拠点とみなしうる前3千年紀の港湾遺跡は、いまのところイラン海岸部では発見されていないようである。アッカド時代やウル第3王朝時代に、マガン（オマーン）のための拠点港がイラン海岸部に設けられた可能性はあるかもしれないが、マガンがイランのインド洋海岸部までを広範に包含する地名であったとは、まだ考えにくい。いずれにせよ、すでにナラム・シン王碑文において、「下の海」すなわちペルシア湾がマガンと結びつけて語られている<sup>(註25)</sup>。そしておそらくウル第3王朝時代最末期に成立したとおもわれる書簡テキストでは、ペルシア湾がはっきりと「マガンの海」とよばれるのである。アッカド王朝第2代の王マニストゥシュは、アンシャンを征服したのちにペルシア湾岸諸国に軍隊を派遣している (Frayne, RIME 2:75-76: Man-ištušu 1)。あきらかにこの軍事遠征は、ペルシア湾の対外貿易の安定化を意図していた。そしてペルシア湾交易ルートは、すくなくともナラム・シン王時代までは維持されていたようにみえる。

## 3 ウル第3王朝時代

ウル第3王朝時代には、アッカド時代について証明されるようなメルハとの直接交流は、おそらくもはや存在しない。ウル第3王朝時代のラガシュ出土文書に、「メルハの村落の貯蔵庫 (i<sub>3</sub>-dub e<sub>2</sub>-dur<sub>5</sub> me-luh-ha<sup>(ki)</sup>)」とよばれる穀物貯蔵庫がしばしば言及され、またときに人名 Me-luh-ha もあらわれるから、かつてパルポラ兄弟はこの時期にメルハ人の村落が存在したと推定した (S. Parpora, A. Parpora and R.H. Brunswig Jr. 1977)。けれども、メルハ人がじっさいにラガシュで活動していた証拠を、私たちはほかにはまったく見出すことはできない。この貯蔵庫名のなかにあらわれる me-luh-ha が地名メルハを指示していたとしても、それはむしろ、アッカド時代にメルハ人がラガシュに住みついていたという事実がウル第3王朝時代にまで伝えられていたことを示しているだけなのかもしれない。それは、ウル第3王朝時代にマルハシ（アッカドの王碑文ではパラフシュとよばれていた）からやってきた外交官らが集団で南部メソポタミアに住み、そして彼らにたいして糧食が定期的に支給されていることと対照的である<sup>(註26)</sup>。Me-luh-ha という人名じたいは、かならずしもメルハ人の存在を指示しているとはかぎらないであろう。はるかのち、前1千年紀のニネヴェで書かれた「神殿リスト」 Canonical Temple List につきのような章句がみえる。

456) e <sub>2</sub> -akkil	bīt <sup>d</sup> [nin-š]ubur ša <sub>2</sub> kiš <sup>ki</sup>
457) e <sub>2</sub> -akkil-du <sub>6</sub> -ku <sub>3</sub>	bīt 2 [š]a <sub>2</sub> nippur <sup>ki</sup>
458) e <sub>2</sub> -tilmun-na	bīt 3
459) e <sub>2</sub> -tilmun-na.ŠA	bīt 4
460) e <sub>2</sub> -igi-zu-uru <sub>16</sub>	bīt 5
461) e <sub>2</sub> -gada-a-ri-a	bīt 6
462) e <sub>2</sub> -cš-bar-me-luh-ha	bīt 7 ša <sub>2</sub> gir <sub>2</sub> -su <sup>ki</sup>

me-luh-ha の語を冠するニヌブル神の神殿が、かつてギルス（＝ラガシュ）に存在していたというのである。テキストを編集したジョージが、これに“House of Decisions, which Cleans the Me’s”という訳を与えているように (George 1993, 82)、me-luh-ha は、「清められたメ（神の<sup>わざ</sup>業）」と解釈したほうがよい。これは、ウル第3王朝時代の人名 Me-luh-ha についても妥当するのではあるまいか<sup>(註27)</sup>。いっぽう、この時代の文書に人名 Lu<sub>2</sub>-Ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup> がしばしば見出されるが、これは文字どおり「マガンの人」を意味する。

ウル第3王朝時代にもディルムンを介する中継貿易はまだおこなわれていたが<sup>(註28)</sup>、この時代に書かれた無数の文書のなかで、ディルムンへの言及の度合いは、極端に少ない。いっぽう、マガンはしばしば文書にあらわれる。前時代とおなじくマガンで産する銅が大量に南部メソポタミアに輸入されただけでなく、交易中継地としてのマガンの重要性が、この時代にますます高まっていったからである。東方メルハからの物産は主としてマガンにまでもたらされ、それを積んだメソポタミアの船がペルシア湾を航行したようにみえる。

ウル第3王朝の創始者ウル・ナンムは、マガン交易を再開（？）したことを誇っている<sup>(註29)</sup>。またウル王朝の最後の王イビ・シン治世時に、ある地方知事がイシュビ・エツラ（のちにイン王朝を創始）の脅威を書簡で王に報告しているが、その書簡のなかで、知事はイシュビ・エツ

ラがすでに「ハマジ国〔北メソポタミア〕からマガンの海まで」をほとんど掌握したと述べているのである<sup>(註30)</sup>。まことにウル第3王朝時代には、ペルシア湾は「マガンの海」、すなわち東方海上交易のための海であった。

ウル第3王朝時代の文書には、「マガンの船」の語が頻出する。ほとんどのばあい、これは、マガンまで航海するために南部メソポタミアで建造された船を指す。あるラガシュ出土文書は、「マガンの船」建造のためにいかにおおくの木材や瀝青が消費されていたかをよく示している(CT731; cf. D.T. Potts 1997: 131-132)。ただ、いわゆる「使者テキスト (messenger texts)」すなわち、南部メソポタミアからラガシュ経由で東方へ出かけ、また東方よりラガシュに到着した人々に糧食を支給した記録には、マガンへの旅行者にかんする直接的な言及はほとんどみえない。かわってこの種のテキストに、「海」を往還する人たちにたいする糧食支給がしばしば記録されている。彼らのおおくは、マガンまででかけたのであろう。なお彼らはしばしば「王の(命令で)沐浴した人(lu<sub>2</sub>a-tu<sub>5</sub>-a lugal)」ともよばれる。危険な航海の無事が王の前で祈られたようにみえる。

マガンの中継点とする交易が可能になった背景として、イラン高原諸国にたいするウル王朝の巧妙な外交政策をあげることができるであろう。ウル王朝はもともと東に位置するマルハシとは一貫して友好関係を結んでいた。シュルギ治世10年代にはすでに王女がマルハシの王家に嫁いでいるし、またシュルギ治世後半から王朝末期まで、マルハシからの外交団が継続してシュメール南部の都市に滞在して、彼らに糧食が支給されている。その他のイラン諸国との関係はもっと複雑であって、ウル王は政略結婚といった懐柔と軍事作戦をくりかえした。ペルシア湾交易の安全性にとって直接的な脅威となりうるのは、テル・マルヤンを首都とするアンシャン国であったろう。アンシャンはペルシア湾岸とりわけマガン(オマーン)を対岸にみるホルムズ海峡に圧力をかけることができたはずである。そのアンシャンにたいしても、ウル王は王女を送り、あるいは軍事制圧をおこなった。さらにはアンシャンをおさえた東北のシマシュキと友好関係を結んでいる。シュルギ治世第34年すなわち「シュルギ王がアンシャンを制圧した年」には、たしかにアンシャンには、メソポタミアから派遣された兵士の軍事キャンプが設営されていた。ラガシュ文書に「アンシャンの兵営から移った」人たちの記録があるからである。そしてこの章句の直前には、「マガンの兵営に移動した」人についての記述があらわれる。アンシャンとマガンの動向とが密接にむすびついていたのである<sup>(註31)</sup>。シュルギ王治世第47年の文書には、マガン経由海外交易の最高責任者であったブードウが du<sub>8</sub>-ši-a 石をもたらし、また王子のひとりがシマシュキを攻撃(?)した功績で、du<sub>8</sub>-ši-a と形容されるサンダルが与えられたとある<sup>(註32)</sup>。このように du<sub>8</sub>-ši-a は、ある種の緑がかかった色の皮を意味することもあった。ウル第3王朝時代には、公的なマガン交易は gaeš とよばれる高級官僚によって監督された。すでにシュタインケラーは、この時代の gaeš は、通商局長官ともいうべき役職であると述べて、第2代の王シュルギ治世後半から第4代の王シュ・シン治世末年頃まで活動した gaeš ブードウ(Bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du と表記されることがおおい)について、簡潔に論じている(Steinkeller 2004:104; id. 2006: 3)。たしかに現在のところ、同じ時期に複数の gaeš が活動していた証拠はない<sup>(註33)</sup>。そして、公的交易の最高責任者としての gaeš の役割は、ほぼまちがいに初期王朝時代までさかのぼる。gaeš が陸路による交易を担当していたことを明示する文書はない。ぎゃくにウル第3王朝時代に「商人(dam-gar<sub>3</sub>)」が海上交易に従事していたかどうか、まだよくわからない。

ブードウは、多数の船乗りを率いる人々(nu-banda<sub>3</sub> ma<sub>2</sub>-gal-gal)を差配しており(OIP 115 210)、また各地の港湾に倉庫をもうけていたらしい。あるラガシュ文書は、「ブードウのそこ

ろから」マガンにでかけていく人物のために、糧食が与えられたことを記録しているが（Nies, UDT 84: 4-6）、ブードゥ自身がマガンまで赴くことがあったのかどうか、よくわからない。彼がウル王権の中樞にいたことは、彼の息子のひとりが王女と結婚していたことから推察される（Steinkeller 2004: 104<sup>46</sup>）。彼はマガンの中継地とする物産を集めており、もちろんマガン地方で産する銅の購入も、彼の重要な任務のひとつであった。おそらくイビ・シン王治世はじめにブードゥはその職を息子のひとりル・エンリラにゆずるが、この息子も「海の gaeš」<sup>47</sup>としてマガン交易の責任者となり<sup>（註 34）</sup>、ウル王権の没落時まで王権のために働きつづけたようにみえる<sup>（註 35）</sup>。

ブードゥが生きた時期に書かれたウル文書がほとんどのこっていないために、彼がウルの港湾で輸入した物産の名前を知ることはほとんど不可能であるが、かわりにラガシュ文書から、彼のところに集められたマガン交易の資本について、かなりの知識を得ることができる。それはラガシュがウル王権のための経済活動（とりわけ農業生産と羊毛工業）の中心地域であったからである。シュ・シン王治世末年ちかくの文書によれば、ブードゥはマガン交易のためラガシュ知事から 600 グル（180,000 リットル）もの大麦を供出させていた<sup>（註 36）</sup>。

gaeš の資本集積にかんして、おそらくシュルギ治世 30 年代に書かれたラガシュ文書 CT 9 18 が興味ある例を示している。この文書は、「前 (?) 知事」の肩書をもつアバムの財産のうち穀物を調査した記録である。王がアバムの財産を没収するために、彼の財産調査を命令しているのである（Maekawa 1986: 147）。そのなかにつぎのような章句がある。CT 9 18, rev. iii 4) 122;4.4.0 gur, 5) e<sub>2</sub> lu<sub>2</sub>-uru-mu i<sub>3</sub>-si, 6) ki du<sub>10</sub>-ga dumu gaeš, 7) ša<sub>3</sub> a-suhur<sup>ki</sup>; 8) 186;4.4.4 sila<sub>3</sub> gur, 9) e<sub>2</sub>-gaeš i<sub>3</sub>-si, 10) gir<sub>3</sub> ur-<sup>d</sup>giš-bar-e<sub>3</sub>, 11) u<sub>3</sub> an-ne<sub>2</sub>-ba-du<sub>7</sub>; 12) 35;4.3.3 sila<sub>3</sub> gur, 13) 5;4.2.7 sila<sub>3</sub> ziz<sub>2</sub> gur, 14) še gan<sub>2</sub> apin-la<sub>2</sub>, 15) ki bu<sub>3</sub>-du<sub>11</sub>, 16) ša<sub>3</sub> ur-sag-pa-e<sub>3</sub>. おそらくこれらは、アバムおよび彼の一族のものであった大麦が gaeš の息子ドウガのところに（rev. iii 4-7）、「gaeš の家」に（viii 8-11）、そして Bu<sub>3</sub>-du<sub>11</sub> なる人物のところに集められた（viii 12-16）と読むべきなのであろう。私たちは gaeš、および Bu<sub>3</sub>-du<sub>11</sub> とよばれているのは、他の文書で Bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du としてあらわれる人物ブードゥのことだと考える。ブードゥ自身と彼の息子が異なるセトウルメント（ur-sag-pa-e<sub>3</sub>, a-suhurki）に大麦を集積していることにも注意しておきたい。また Nies UDT 38 も、さまざまな手段で「ブードゥの大麦」が集められていたことを示している<sup>（註 37）</sup>。

ブードゥの息子ル・エンリラも、マガン交易にさいして 1800 グルもの大麦をギルス知事から徴発していた<sup>（註 38）</sup>。イビ・シン王時代に書かれたウル文書によれば、ル・エンリラは大麦いがいに羊毛製品や植物油をも、ウルから送りだしていた<sup>（註 39）</sup>。

ウル文書からはまた、交易をつうじて東方から到来した品目について、かなり詳しい情報を得ることができる。「マガンの銅」などマガン産と推定されるものいがいに、「マガンのアシ」<sup>（註 40）</sup>、「メルハの銅」、「メルハのアバ木材」、象牙（製品）などが運ばれてきたのである。

#### 4 イシン・ラルサ時代、バビロン第一王朝時代

ウル第 3 王朝が崩壊するとともに、公的交易の中継地としてのマガンの役割がおわる。おそらくこれは、南部メソポタミアに分立する小国家は、もはやペルシア湾岸部とりわけマガンや対岸のイラン海岸部にまで政治的影響力をおよぼすことができなくなったからであろう。南部

メソポタミアから出土する経済文書には、交易先としてマガンが言及されることはない。かわってウル文書に、ディルムンにまで交易活動にでむく人々についての言及がある (Oppenheim 1954; Leemans 1960)。ふたたびディルムンがメソポタミアのために中心的中継港として機能しはじめたのである。ただしディルムン交易は、古バビロニア時代以降も活発であったとはおもわれない。そしてディルムン交易についての具体的な記憶がうすれはじめたころ、ディルムンがアラッタとともに、アッカド語の kabtu (“noble, important”) と同義語であるとして、文学テキストで用いられはじめる。

ほどなく、メソポタミアへの銅の供給地としてのマガンの役割も、ほとんど終わるであろう。このち銅はアナトリア、東地中海地域からメソポタミアにもたらされるようになる。ほぼ時期をおなじくして、東方ではインダス文明が姿を消す。もはやメソポタミアの人々は、メルハをインダス河地域と認識できなくなるであろう。

# 【註】

- 1) zabar-dil<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-dilmun (e.g. DP 69, i 1) .
- 2) ma<sub>2</sub>-dilmun kur-ta gu<sub>2</sub>-giš mu-gal<sub>2</sub> (Frayne, RIME 1: Ur-Nanše 2, 17, 22, 23); ma<sub>2</sub>-dilmun gu<sub>2</sub>-giš mu-gal<sub>2</sub> (Ur-Nanše 5, 6a).  
なお「木材 (giš)」の直前にみえる語 gu<sub>2</sub> についての解釈は、まだ確定的ではない。最近、フレインは Ur-Nanše 2 その他にみえる表現を、“(Ur-Nanše, king of Lagaš) had ships of Dilmun submit timber as tribute from the foreign Land (to Lagaš)” と訳している (Frayne, RIME 1 84 et passim)。Cp. Cooper, SARI I 23: “(Urnanshe, king of Lagash,) had ships of Dilmun transport timber from foreign lands (to Lagash); Heimpel 1987: “(Dem Ur-Nanše, König von Lagaš,) legten sich Tilmunschiffe aus dem Land (nämlich Tilmun) das Joch auf den Nacken.”
- 3) E.g. Fö 194, i 1) [X]+14 ma-na A.EN-da.urudu, 2) nig<sub>2</sub>-sa<sub>10</sub>-ma, 3) lugal-an-da, ii 1-2) ensi<sub>2</sub>-lagaš<sup>ki</sup>-ra, 3) ur<sup>d</sup>-en-ki, 4) dam-gar<sub>3</sub>, 5) kur-dilmun<sup>ki</sup>-ta, iii 1) mu-na-DU-a, 1.
- 4) ED Metals 27) gin<sub>2</sub>-dimun; cf. Picchioni, MEE 15 19: Ešbar-kin (Ebla) v 4) dilmun-gin<sub>2</sub>.
- 5) ARET 5 7, xi 4) SAR<sup>2</sup>.[D]UB<sup>2</sup> MAH.XX [ ] X.GIŠ.ŠE<sup>ki</sup>, xii 1) ŠUBUR<sup>ki</sup> Sum-ar-rum<sup>ki</sup> TILMUN<sup>ki</sup>, 2) GAR in ŠU in [D]UB<sup>2</sup>.ŠE<sub>3</sub> DINGIR.DINGIR X X “..., X.GIŠ.ŠE<sup>ki</sup>, Subar, Sumer, and Tilmun, were placed in (his/her) hand” (Krebernik 1992: 93). もちろんこの文学作品は、南メソポタミア起源とみなしてよい。
- 6) RTC 21, i 1) 60 naga gur-sag-gal<sub>2</sub>, 2) 60 ma-na nig<sub>2</sub>-ib, 3) 10 ma-na kur-gi-rin, 4) 21 giš-hur, 5) 1 GAD+A urudu, ii 1) 1 la-ba-an-kur-ra, 2) nam-gaeš<sub>2</sub>-ak, 3) ma<sub>2</sub>-elam-ma-kam, 4) gir<sub>3</sub>-ni-ba-KU, 5) gaeš<sub>2</sub>-mah-e, iii 1) e<sub>2</sub>-gal-la, 2) i<sub>3</sub>-DU, 5; DP 518, i 1) 5 ma-na na<sub>4</sub> si-sa<sub>2</sub>-ta sig<sub>2</sub>-ba gal-gal, 2) bar-tug<sub>2</sub>-bi 3-am<sub>6</sub>, 3) 5 ma-na ku<sub>3</sub>-luh-ha, 4) nig<sub>2</sub>-sa<sub>10</sub>-ma-kam, ii 1) bara<sub>2</sub>-nam-tar-ra, 2) dam lugal-an-da, 3-4) ensi<sub>2</sub>-lagaš<sup>ki</sup>-ka-ke<sub>4</sub>, 5) gir<sub>3</sub>-ni-ba-KU, 6) gaeš<sub>2</sub>-ra, iii 1) e<sub>2</sub>-gal-la, 2) e-na-la<sub>2</sub>, 3) kur dilmun<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub>, 4) ba-DU, 6.
- 7) Sargon 11 (Frayne, RIME 2 28), Sum. 9) ma<sub>2</sub>-me-luh-ha<sup>ki</sup>, 10) ma<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>, 11) ma<sub>2</sub>-dilmun<sup>ki</sup>, 12) kar-ag-ge-de<sub>3</sub><sup>ki</sup>-ka, 13) bi<sub>2</sub>-keš<sub>2</sub>; Akk. 11) MA<sub>2</sub> me-luh-ha, 12) MA<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-gan.KI, 13) MA<sub>2</sub> tilmun.KI, 14) in ka<sub>3</sub>-ri<sub>2</sub>-im, 15) ši a-ka<sub>3</sub>-de<sub>3</sub>.KI, 16) ir<sub>3</sub>-ku-us [He moored the ships of Meluhha, Magan, and Tilmun at the quay of Agade.] これが、楔形文字テキストのなかでディルムン、マガン、メルハを並べて記述する、もっともはやい例である。なお、マガン、メルハへの言及があるとしてミカロウスキ (Michalowski 1988) によって紹介されたテキストは、やはり初期王朝時代にはさかのぼらず、アッカド時代ないしグデア王時代の作品のようにみえる。ISET 1 212, i 6) ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>, 7) me-luh<sup>ki</sup>, 8) gu<sub>2</sub> giš ha-ra-ab-gal<sub>2</sub>.
- 8) BIN 8 298, rev. 1) 1 i<sub>3</sub> sila<sub>3</sub>, 2) da-ti, 3) lu<sub>2</sub>-tuš ma<sub>2</sub> me-luh-ha-ka; Yang Zhi, Adab A 712, 10) [ ]+5;0.0.0 še-ba 4 guruš ma<sub>2</sub> me-luh-ha; Yang Zhi, Adab A 1014, 3) 0;0.3.0 me-luh-ha-m[e]; Banca d'Italia, Adab 102, recto 1) 0;0.1.0 i<sub>3</sub>-šah<sub>2</sub><sup>giš</sup> sum-ma sila<sub>3</sub>, 2) e<sub>2</sub>-nig<sub>2</sub>-gur<sub>11</sub>-ta, 3) mu-ni-ra, 4) an-na-sum, verso 1) gir<sub>3</sub>-gin-na, 2) ma<sub>2</sub> me-luh-ha-še<sub>3</sub>, ...; CT 50 76, obv. 1) 10 gin<sub>2</sub> ku<sub>3</sub>, 2) ku<sub>3</sub> zu<sub>2</sub>-gul-



la-kam, 3) UR.UR ni-is-ku, 4) dumu amar-lu<sub>2</sub>-KU, 5) lu<sub>2</sub>-sun<sub>2</sub>-zi-da, 6) lu<sub>2</sub> me-luh-ha-ke<sub>4</sub>, 7) i<sub>3</sub>-na-ab-su-su …

9) 「メルハの通訳」シュ・イリシュの印章（アッカド時代）がのこっている（Collon 1987: No. 637）。通訳者のセム系人名に注意せよ。

10) たとえばラガシュ出土 ITT 1 1418 は「ディルムンの船」（建造？）のために多数の人々が動員されている記録である。なおこの時代には、シュメール北部の都市ニップルでも、「ディルムンの船」を瀝青で補強している（Westenholz, OSP 2 128, 132）。

11) もっとも典型的な作品は、ゾウ、ワニ、サイが描かれているテル・アスマル出土印章（おそらくアッカド時代後期）である（Frankfort 1955: pl. 161, No. 642; D.T. Potts 1997: Fig. XII 5）。アッカド第5代の王シャルカリシャリのもとで働いた書記イブニ・シャルムの印章には水牛が描かれている（Collon 1987: No. 529）。なおこれらの動物がじっさいにメソポタミアに到来していたのかどうか、まだわからない。また、アッカド時代にメルハの物産や生物がすべて海路でメソポタミアにもたらされたわけではないであろう。イラン高原を経由して、あるいはイランにしばらくとどまったのちにメソポタミアに陸路で到来したこともあったにちがいない。ウル第3王朝時代のラガシュで書かれた「使者テキスト」では、南イランのアンシャンからの使者がシュメール北部のニップルを経由してラガシュに到着したと明記されることがおおい。メソポタミアとイランとの陸路についてはポッツの論述を参照のこと（T.F. Potts 1994: 38-43）。

12) シュタインケラーの2007年論文にみえる地図（Steinkeller 2007: 219）を、1982年論文のそれ（Steinkeller 1982: 265）と比較することで、前3千年紀後半イラン高原にかんする彼の歴史地理研究の進展を、よく理解することができる。前者では、1) シマシュキの領域がより拡大されて描かれており、2) またマルハシの領域がイラン海岸ちかくジローフト地域までを含むと、はっきりと指示されている。いっぽう新地図からはアラッタが消えている。

13) パラフシュをマルハシに同定する考えは、ヴェステンホルツ（Westenholz 1999: 97）をのぞく研究者によって承認されている。

14) 「マルハシ石」は、ウル第3王朝時代いらい、さまざまな時代の語彙リスト（e.g. MSL 10 58, HAR-ra XVI, Forerunner from Nippur: 119）、行政文書、文学テキスト（e.g. Lugal-e [ed. Van Dijk] 595, 597, 600, 602）にあらわれる。石名が地名に由来することは、まちがいない。同定は確定していないが、シュタインケラーはクロライト（緑泥石）ないしはステアタイト（凍石）ではないかとしている（Steinkeller 2006: 2-3）。

15) バビロニアの語彙リストでは、du<sub>8</sub>-ši-a 石は、しばしば「マルハシの」と形容される（e.g. MSL 10 5, HAR-ra XVI 27: na<sub>4</sub>.du<sub>8</sub>-ši-a-mar-ha-ši: MIN pa-ra-ši-i）。du<sub>8</sub>-ši-a がなにを指すかも研究者によって見解がわかれる。たとえばシュタインケラーは1982年には瑪瑙ないし玉髄と推定していたが（Steinkeller 1982: 250）、この語が緑青を使ったある種の皮革の色を指すばあいがあることから、最近マルハシ石とおなじく、クロライトないしステアタイトであろうと考えている（Steinkeller 2006: 3-5）。つまり彼は du<sub>8</sub>-ši-a と marhušu がおなじ石にたいする名称である可能性が高いとしているが、いっぽうで彼は、類似の2種類の石（クロライトとステアタイト）についての、それぞれの呼称である可能性もあるという（Steinkeller 2006: 6-7）。

16) 大規模な盗掘ののちジローフト地域で開始された調査、発掘については、とりあえず Lawler 2004 を参照のこと。ただ2003年にテヘランで公開されたマジドザーデの書物（筆者未見）には、手きびしい評価がある（Muscarella 2005）。なお2008年6月に総合地球環境学研究所（京都）で開催されたインダス文明とイランとの交流にかかわる国際シンポジウムにおいて、マジドザーデが現段階でのコナル・サンダル発掘成果を報告している。

17) かつて、エアンナ III 時代のウルク文書にアラッタの名前がみえると考えられたこともあるが（ZATU No. 35）、これには否定的な見解がおおい。

- 18) Sargon 8 (Frayne, RIME 2:23-24), 1) *šar-ru-GI*, 2) LUGAL, 3) KIŠ, 4) [S]AG.GIŠ.RA, 5) [N]IM.KI, 6) *u<sub>3</sub>*, 7) *pa<sub>2</sub>-ra-ah-šum*. KI [Sargon, king of the world, conqueror of Elam and Parahšum].
- 19) 「リムシュ、全土の王、エラムおよびパラフシュの殺戮者」は Rīmuš 9 (Frayne, RIME 2: 59-60) および Rīmuš 17 (RIME 2: 67) にみえる。「エラムおよびパラフシュを殺戮したとき」という表現も、おおくのリムシュ碑文にあらわれる (e.g. Rīmuš 11[RIME 2:62])。
- 20) Narām-Sin 25 (Frayne, RIME 2:130), 1) *na-ra-am-<sup>d</sup>EN.ZU*, 2) LUGAL, 3) *a-ka<sub>3</sub>-de<sub>3</sub>.KI*, 4) *ša-pi<sub>2</sub>-ir*, 5) KIŠ MI KAM, 6) KALAM, 7) NIM.KI, 8) *ka<sub>3</sub>-li<sub>2</sub>-ša-ma*, 9) *a-di<sub>3</sub>-ma*, 10) *pa<sub>2</sub>-ra-ah-šum.KI*, 11) *u<sub>3</sub>*, 12) KALAM, 13) [Š]UBUR<sup>š<sub>u</sub>-bar-tim</sup>.KI, 14) *a-di<sub>3</sub>-ma*, 15) GIŠ.TIR, 16) [GI]Š.ERIN [Narām-Sin, king of Agade, commander ... of all the land of Elam, as far as Parahšum, and the land of Subartum as far as the Cedar Forest.]
- 21) Ibbi-Sin 4 (Frayne, RIME 3/2: 374), 9) *ur-GUN<sub>3</sub>-a-me-luh-ha<sup>ki</sup>*, 10) *m[ar-h]a-ši<sup>ki</sup>-[ta]*, 11) *gu<sub>2</sub>-un-še<sub>3</sub> mu-na-ab-tum<sub>2</sub>-ma-ni*, 12) *tam-ši-lum-bi*, 13) *mu-dim<sub>2</sub>*, 14) *nam-ti-la-ni-še<sub>3</sub>*, 15) *a mu-na-[r]u*, 16) *ur-GUN<sub>3</sub>-a-ba*, 17) *he<sub>2</sub>-[d]ab<sub>3</sub>*, 18) *mu-b[i-i]m* [ (Ibbi-Sin) fashioned an image of a Meluhhan speckled “dog” (= leopard?) that had been brought to him as tribute from Marhaši. シュタインケラーも、これを豹とするが (Steinkeller 1982:253; 2006:11)、ポッツはチータと考えている (D.T. Potts 2002)。
- 22) Narām-Sin 4 (Frayne, RIME 2 100), 1) *na-ra-am-<sup>d</sup>EN.ZU*, 2) LUGAL, 3) *ki-ib-ra-tim*, 4) *ar-ba-im*, 5) BUR, 6) NAM. RA.AK, 7) *ma<sub>2</sub>-gan.KI* [5-7: a bowl, booty of Magan]. このテキストにかんしては、T.F. Potts 1989:133-13; id.1994:235-236; cp. D.T. Potts 1986.
- 23) Waetzoldt 1992:135; Heimpel 1982; id. 1987:69-70; D.T. Potts 1986; id.1990a 142-143.
- 24) D.T. Potts 1986:274-275.
- 25) Narām-Sin 1004 (Frayne, RIME 2: 163), 9') *kur-šubur-r[a] gaba-gaba-a-ab-[ba I]GI.NIM-ma x [x]*, 10') *u<sub>3</sub> ma<sub>2</sub>-gan.KI ma-da-[ma-da-bi] kur x [...]*, 11') *bal-a-ri<sub>2</sub> a-[ab-ba ...]* [The land of Subartum on the shores of the Upper Sea, and Magan, along with its provinces ... the other side of the sea ...].
- 26) プズリシュ・ダガン文書のなかに、マルハシから派遣された使者たちに小家畜などを与えた記録が、少なくともシュルギ治世末期からイビ・シン王初年にいたるまで、ほとんど途ざれることなくのこっている (Michalowski 2005:73-74 [Excursus 1: The rulers of Marhaši and their envoys to the Ur III court])。
- 27) 「神殿リスト」CTL 458 にみえる *e<sub>2</sub>-tilmun-na* については、ジョージは、“House of the Noble” ないし “Tilmun-House” と解釈している (George 1993:150)。なおイナンナ神のための同名の神殿がウルにも存在していた。CTL 343 *e<sub>2</sub>-[tilmun-na]: [bīt 20] ša<sub>2</sub> uri<sup>ki</sup>*; MSL 13 73: Proto-Kagal 227) *e<sub>2</sub>-dilmun*. イシン・ラルサ時代の王碑文にもこの神殿が言及されている (Išme-Dagān 9 iv 7' [Frayne, RIME 4 41]; Warad-Sin 27, 32 [RIME 4 253])。フレインは後者にみえる *e<sub>2</sub>-dilmun(-na)* を “Solemn House” と訳しているが、いうまでもなく、これは、バビロニア人が *dilmun* の語にアッカド語 *kabtu* の訳を与えていたことを前提としている。
- 28) イビ・シン治世 1 年のウル文書によれば、大量の羊毛がディルムンに運ばれている (UET 3 1507)。
- 29) Ur-Nammu Law Code (Roth, Law Collections 15)(A ii 78-86)*ki-sar-ra ma<sub>2</sub> Ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>-na<sup>d</sup>Nanna a<sub>2</sub><sup>d</sup>Nanna lugal-ga<sub>2</sub>-ta he<sub>2</sub>-mi-gi<sub>4</sub> Uri<sup>ki</sup>-ma ha-ba-zalag<sub>2</sub>* [By the might of the god Nanna, my lord, I returned Nanna's Magan-boat to the quay (?), and made it shine in the city of Ur.]; Ur-Nammu 17 (Frayne, RIME 3/2:41), 12) *gaba-a-ab-ba-ka* 13) *ki-SAR-a nam-gaeš bi<sub>2</sub>-sa<sub>2</sub>*, 14) *ma<sub>2</sub>-ma<sub>2</sub>-gan šu-na mu-ni-gi<sub>4</sub>* [On the shore he had trade reach (the) ki-SAR-a (and) returned the ships of Magan into his (Nanna's) hands.]
- 30) Michalowski 1976: No. 21 (Puzur-Šulgi to Ibbi-Sin), 10) *ma-da ha-ma-zi<sup>ki</sup>-ta en-na a-ab-ba ma<sub>2</sub>-gan-na<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub>*.
- 31) MVN 10 149, ii 6-7) 70 *guruš u<sub>4</sub> 1-še<sub>3</sub>*, *ugnim* (SU.KU.ŠE<sub>3</sub>.KI.GAR.RA) *ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> bal-a*, 8-9) 30 *la<sub>2</sub>-l guruš u<sub>4</sub> 1-še<sub>3</sub>*, *ugnim an-ša-an<sup>ki</sup>-ta bal-a*. 私たちの解釈とはちがって、シュタインケラーはこれらの章句後半部を前半部ときりはなして、それぞれ “troops transferred to Makkan”, “troops transferred from Anšan” と訳している (Steinkeller 2007:

226<sup>24</sup>)。

32) MVN 13 672, obv. 1) 1<sup>kuš</sup> e-sir<sub>2</sub> du<sub>8</sub>-ši-a [e<sub>2</sub>]-ba-an, 2) bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du, 3) u<sub>4</sub><sup>na4</sup> du<sub>8</sub>-ši-a mu-ni-ku<sub>x</sub>-ra-a, 4) 1<sup>kuš</sup> e-sir<sub>2</sub> du<sub>8</sub>-ši-a [e<sub>2</sub>]-ba-an, 5) šu<sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub> dumu-lugal, rev. 1) u<sub>4</sub> LU<sub>2</sub>.SU.A<sup>ki</sup> mu-tag-tag-a, 2) im-PI-e-eš<sub>2</sub>, 3) e<sub>2</sub>-a-i<sub>3</sub>-li<sub>2</sub> maškim, 4) ki e<sub>2</sub>-a-i<sub>3</sub>-li<sub>2</sub>-ta, 5) ba-zi, 6) ša<sub>3</sub> ki-sur-ra<sup>ki</sup>, 7) iti mašda-ku<sub>3</sub>-gu<sub>7</sub>-a-kam, 8) Š 47. この文書前半部分は、シュタインケラーによって紹介されている (Steinkeller 2006: 319)。

33) おそらくシュルギ王治世中頃にウル・ニギンムなる人物が「海の gaeš」<sup>25</sup>として活動していた (Frayne, RIME 3/2 222: Šulgi 2036)。彼とブードウとの関係は、まだわからない。

34) ル・エンリラは、イビ・シン王より下賜された印章をもっており、このなかで彼は「海の gaeš (gaeš a-ab-ba-ka)」とよばれている。なおこの印章が押されている UET 3 41 (Ibbi-Sîn 19) は裁判記録であって、ル・エンリラは裁判で「裁判者 (di-ku<sub>3</sub>)」の役割をはたしている。彼がブードウの息子であることを直接的に示す文書は UET 9 962, UET 9 371 である。両テキストとも海外交易にかかわる記録であり (前者には「海外交易 (nam-gaeš a-ab-ba-ka)」という章句がみえ、後者では輸入された鉱物、石材が言及されている)、人名はそれぞれ lugal<sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> dumu bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du (obv. 4'-5'), lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> dumu KA.MAH<sup>2</sup> (rev. 5'-6') と転写されているが、前者の前半部は lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>、後者の後半部は dumu bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du の誤写と推定できる。

35) UET 3 702 には、イシンでの買いつけを実行するため (mu nig<sub>2</sub>-sa<sub>10</sub>-ma in-si-in<sup>ki</sup>-še<sub>3</sub> [rev. 9']) 大小の諸神殿から大量の金、銀、銅などが供出されたことが記録されている。穀物買いつけのためイシュビ・エツラがイシンに派遣され、のち彼がイビ・シン王を裏切ったことはイシュビ・エツラと王とのあいだの往復書簡によってよく知られているが、これはそれを想起させる重要な記録なのである。そしてこの文書で、供出命令を伝えた (gir<sub>3</sub> [rev. 12']) とされるル・エンリラが同名の gaeš と同一人物であるというのは、じゅうぶんにありうる。文書の成立年であるイビ・シン 13 年には、「海の gaeš」ル・エンリラは、まだ活動していた (前註参照)。

36) ITT 2 776, obv. 1) 600;0.0.0 še gur, 2) gu<sub>2</sub> ma<sub>2</sub>-gan-še<sub>3</sub>, 3) ki ensi<sub>2</sub> gir<sub>2</sub>-su<sup>ki</sup>-ta, 4) bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du, 5) šu ba-ti, 6) kišib ur-gi<sub>6</sub>-par<sub>3</sub>, rev. 1) dumu šu-na-ka, 2) i<sub>3</sub>-dub a-ša<sub>3</sub> i<sub>3</sub>-zi-na, ...

37) UDT 38, obv. 1) [x]+20;0.0.0 še gur-lugal, 2) še bu<sub>3</sub>-u<sub>2</sub>-du, 3) ša<sub>3</sub>-bi-ta, 4) 62;4.0.0 sa<sub>2</sub>-du<sub>11</sub> ensi<sub>2</sub>, 5) 40;0.0.0 eš<sub>3</sub>-didli, 6) 30;0.0.0 ur-mes dumu ba-da-ri<sub>2</sub><sup>2</sup>, 7) 75;0.0.0 X.[ ], rev. 1) ur<sub>5</sub>-bi-še<sub>3</sub>-ba-du<sub>11</sub>, 2) 10;0.0.0 ur-SUKKAL, 3) 1;1.0.0 lu<sub>2</sub>-kal-la, 4) (erased).

38) TCTI 2 L. 2768 (tablet), obv. 1) 1800;0.0.0 še gur, 2) numun<sup>2</sup> gub-ba ma<sub>2</sub>-gan-na, 3) ki ensi-gir<sub>2</sub>-su<sup>ki</sup>-ta, 4) lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>, 5) šu ba-ti, 6) mu lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub>-še<sub>3</sub>, rev. 7) kišib ur-kisal dumu lugal-mug<sup>2</sup> (AŠ+NI), 8) gur-bi su-su-dam (Ibbi-Sîn 3).

39) UET 3 1689, obv. 1) 300 tug<sub>2</sub> guz-za [gin], 2) 300 tug<sub>2</sub> sag-uš-bar, 3) 300 tug<sub>2</sub> uš-bar, 4) ki ur<sup>d</sup>-šul-gi-ra-ta, 5) 2/3 gu<sub>2</sub> sig<sub>2</sub>-GI, 6) e<sub>2</sub>-dub-ba-ta, 7) nig<sub>2</sub>-sa<sub>10</sub>-ma urudu ma<sub>2</sub>-gan<sup>ki</sup>, ... rev. 3) lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> šu ba-an-ti (Ibbi-Sîn 4); UET 3 1511, obv. 1) 60 gu<sub>2</sub> sig<sub>2</sub>-GI, 2) 10 gu<sub>2</sub> u<sub>2</sub>-NIN<sub>9</sub>.[ ], 3) 20 gu<sub>2</sub> PEŠ.X.[ ], 4) e<sub>2</sub>-dub-ba-ta, 5) 70 tug<sub>2</sub> uš-bar, 6) ki ur<sup>d</sup>-šul-gi-ta, 7) 6;0.0.0 i<sub>3</sub>-giš-du<sub>10</sub>-ga gur, 8) ki lugal-gaba-ta, rev. 1) 180 kuš.[ ], ... 4) nig<sub>2</sub>-sa<sub>10</sub>-ma urudu-še<sub>3</sub>, 5) lu<sub>2</sub><sup>d</sup>-en-lil<sub>2</sub>-la<sub>2</sub> šu ba-an-ti (Ibbi-Sîn 2).

40) 「マガンのアシ」は、槍などの製作に用いられている。ヴェツォルトは、オマーンやホルムズ海峡対岸部では「アシ」は産せず、「竹」ではないかという。とすれば、この語の「マガン」とは中継地を指しているにすぎないということになる (Waetzoldt 1992: 135)。

## 【引用・参考文献】

Collon, D. (1987) *First Impressions: Cylinder Seals in the Ancient Near East*. London.

Collon, D. (1986) *Sumerian and Akkadian Royal Inscriptions*, vol. 1, New Haven [= SARI 1].

Frankfort, H. (1955) *Stratified Cylinder Seals from the Diyala Region* (Oriental Institute Publications 72), Chicago [= OIP 72].

- Frayne, D.R. (1990) *Old Babylonian Period (2003-1595 BC): The Royal Inscriptions of Mesopotamia. Early Periods*, Vol. 4. Toronto [= RIME 4].
- Frayne, D.R. (1993) *Sargonic and Gutian Periods (2334-2113 BC)*. Toronto [= RIME 2].
- Frayne, D.R. (1997) *Ur III Period (2111-2004 BC)*. Toronto [= RIME 3/2].
- Frayne, D.R. (2008) *Presargonic Period (2700-2350 BC)*. Toronto [= RIME 1].
- George, A.R. (1993) *House Most High: The Temples of Ancient Mesopotamia*. Winona Lake.
- Green, W.G. und H.J. Nissen (1987) *Zeichenliste der archaischen Texte aus Uruk: Archaische Texte aus Uruk 2*, Berlin [= ZATU].
- Heimpel, W. (1982) A first step in the diorite question. *Revue d'Assyriologie* 76: 65-67.
- Heimpel, W. (1987) *Das Untere Meer*. Zeitschrift für Assyriologie 77: 22-91.
- Krebernik, M. (1992) "Mesopotamian myths at Ebla: ARET 5, 6 and ARET 5, 7", in Fronzaroli, P. (ed.) *Literature and Literary Language at Ebla* (Quaderni di Semitistica 18). Firenze. pp.63-149.
- Lawler, A. (2004) Iranian dig opens window on new civilization. *Science* 21 vol.304 (May 2004), no. 5674: 1096-1097.
- Leemans, W.F. (1960) *Foreign Trade in the Old Babylonian Period*. Leiden.
- Maekawa, K. (1996) Confiscation of private properties in the Ur III period. *Acta Sumerologica* 18: 103-168.
- Michalowski, Piotr (1976) *The Royal Correspondence of Ur*. PhD Dissertation, Yale University.
- Michalowski, Piotr (1988) Magan and Meluhha once again. *Journal of Cuneiform Studies* 40: 156-64.
- Michalowski, Piotr (2005) Iddin-Dagan and his family. *Zeitschrift für Assyriologie* 95: 65-76.
- Muscarella, O. White (2005) Jiroft and "Jiroft-Aratta": A review article of Yousef Madjidzadeh, Jiroft: The Earliest Oriental Civilization. *Bulletin of the Asia Institute* 15: 173-198.
- Oppenheim, A.L. (1954) The Seafaring merchants of Ur. *Journal of the American Oriental Society* 74: 6-17.
- Parpola, S., Parpola, A., and R.H. Brunswig, Jr. (1977) The Meluhha village. Evidence of acculturation of Harappan traders in late third millennium Mesopotamia?. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 20: 129-164.
- Potts, Daniel T. (1986) The booty of Magan. *Oriens Antiquus* 25: 271-285.
- Potts, Daniel T. (1990) *The Arabian Gulf in Antiquity*, vols. 1-2. Oxford.
- Potts, Daniel T. (1997) *Mesopotamian Civilization: The Material Foundation*. London.
- Potts, Daniel T. (2002) Total prestation in Marhashi-Ur relations. *Iranica Antiqua* 37: 343-357.
- Potts, Daniel T. (2005) In the beginning: Marhashi and the origins of Magan's ceramic industry in the third millennium BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 16: 67-87.
- Potts, Timothy F. (1989) Foreign stone vessels of the late third millennium B.C. from southern Mesopotamia: their origins and mechanisms of exchange. *Iraq* 51: 123-164.
- Potts, Timothy F. (1994) *Mesopotamia and the East: An Archaeological and Historical Study of Foreign Relations ca. 3400-2000 BC*. Oxford University Committee for Archaeology Monograph 37. Oxford.
- Steinkeller, Piotr (1982) The question of Marhaši: A contribution to the historical geography of Iran in the third millennium B.C. *Zeitschrift für Assyriologie* 72: 237-65.
- Steinkeller, Piotr (1988) On the identity of the toponym LÚ.SU. (A). *Journal of the American Oriental Society* 108: 197-202.
- Steinkeller, Piotr (1989) Marhaši. *Reallexikon der Assyriologie* Bd. 7: 381-382.
- Steinkeller, Piotr (2004) "Toward a definition of private economic activity in third millennium Babylonia", in R. Rollinger and Chr. Ulf (eds.) *Commerce and Monetary Systems in the Ancient World: Means of Transmission and Cultural Interaction*. Proceedings of the Fifth Annual Symposium of the Assyrian and Babylonian Intellectual Heritage Project Held in Innsbruck, Austria, October 3rd-8th 2002. Stuttgart. pp.91-111.

Steinkeller, Piotr (2006) New light on Marhaši and its contact with Makkan and Babylonia. *Journal of Magan Studies* 1: 1-17.

Steinkeller, Piotr (2007) New light on Šimaški and its rulers. *Zeitschrift für Assyriologie* 97: 215-232.

Waetzoldt, H. (1992) ‘Rohr’ und dessen Verwendungsweisen anhand der neusumerischen Texte aus Umma. *Bulletin on Sumerian Agriculture* 6: 125-146.

Westenholz, A. (1999) “The Old Akkadian period: History and culture”, in P. Attinger und M. Wäfler (hrsg.) *Mesopotamien: Akkade-Zeit und Ur III-Zeit*. Fribourg-Göttingen. pp.17-117.

本稿は、セム系部族社会の形成（特定領域研究「セム系部族社会の形成・ユーフラテス流域ビシュリ山系の総合研究」）Newsletter No.11:14-23 に発表した原稿を修正の上、再録したものである。